

NHKラジオ「実践ビジネス英語」
講師 杉田敏

日本の語学ビジネスの市場規模は約8700億円と推定されている（矢野経済研究所調べ）。語学学校や学習材料、語学周辺ビジネスなどを含めて日本人が語学学習に投資する年間の総額で、大部分は英語ビジネスと考えられる。

ところが、英語を母語としない人たちを対象とする英語能力測定試験TOEFLのスコアにおいて、日本人の平均点は世界でほぼ最下位のグループに属している。

多大な投資をしながら費用対効果の悪い原因は何か。文部科学省の責任や教師の質を挙げる識者もいるが、最大の元凶は学習者自身の「甘えの構造」だ。

英語をある程度モノにするには最低2000時間の学習が必要だといわれる。英会話

英語習得を阻害している「神話」

学校に週1、2回行ったくらいでは上達しないのは当たり前である。学校の音楽の時間にピアノを習っただけでピアノリストになった人はいない。さらなる自助努力が必要だ。

ちなみに「楽しみながら」「知らず知らずのうちに」「涙なしに」など、簡単に英語をマスターできるような暗示を与える題名の本や教材、語学学校などの宣伝文句が氾濫している。しかし、「こうした「神話」に惑わされてはならない。ただ「シャワーのように」「BGMのように」「英語を聞いていたのでは、どんなに長時間行っても効果が上がるはずはない。」

語学の勉強は決して楽ではない。学習機会や道具を手に入れるにはお金が必要だ。勉強の時間と空間はどこかでつくり出さなくてはならない。アスリートは「サンマ」という戦略をよく使う。「時間、

空間、仲間」の3つの「間」を利用して努力することである。かつては海外赴任が決まれば、語学学校に通うのが通例だったが、今では外国語トレーニングソフトウェアを渡されるケースも多い。空いている時間をうまく利用して学習せよ、ということだ。

最新技術の利用も欠かせない。多くのスマートフォンには音声認識のソフトやアプリが組み込まれているので、それらを相手に話しかけてみれば、自分の発音の弱点を知ることできる。

プレゼンテーションの模様を録画した動画アーカイブである「TED」や映画も効果的に利用できるし、オンライン英会話も人気だ。英会話教室を運営するイオンは最近、仮想現実（VR）対応の英会話学習ソフトを発表した。まだ初歩的なものだが、今後が期待できる。